

## 覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育における 高校教諭の意識

松本 禎明<sup>\*1</sup>・成澤 友佳里<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>九州女子短期大学専攻科子ども健康学専攻  
北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

<sup>\*2</sup>福岡県立玄海高等学校 福岡県古賀市舞の里三丁目6-1 (〒811-3114)

(2017年5月29日受付、2017年7月6日受理)

### 要 旨

薬物乱用は、使用者個人の私生活だけの問題に留まらず、使用が続けば強い依存から抜け出せなくなり不快を快に変えようと負の連鎖が始まり、その使用量も次第に増えて行くことに繋がることが多い。特に、覚せい剤については精神的依存性が極めて強く、中枢神経系の興奮により集中力が増し爽快感を抱くようになるが、幻覚も徐々に増え被害妄想的な感情に苛まれ錯乱状態に陥ることもあり、家庭生活の崩壊、結果的に社会生活の中で孤立してしまうことに繋がりがかねない。

薬物使用開始のきっかけはやはり興味関心が大きく関与しており、若い世代における学校教育での啓発活動が極めて重要である。今回、高等学校の教諭に対して覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育のあり方について書面調査を行った所、その教育には学校種を超えた連携の必要性と生徒だけではなく教諭の研修も重要であるとの指摘があった。

効果的な薬物乱用防止教育を実践するためには、教諭と生徒が共に協調しながら学び続ける姿勢を堅持していくことが重要であることが分かった。

### 1. 緒言

薬物乱用は、使用者個人だけの問題に留まらず、友人、サークル、家族及び社会にまで広く大きな影響を与える。人生経験の中での勉強や仕事の失敗などは努力や再チャレンジにより取り戻せることは少なくないが、薬物については一度手を出してしまうと後戻りできない深刻な事態に陥ってしまうことが少なくない。

薬物使用開始のきっかけはやはり薬物に関する興味関心が大きく関与しているが、背景に社会生活や日常生活でのストレスもかなりの誘因となる可能性が大きい。最近の特徴として、薬物の中で覚せい剤乱用は若い世代より中高年の世代で増えているという。これは、純粋に中高年の世代の覚せい剤使用者が増えているというより、その当該者は最初若い世代で使った経験のある人が多く、使用や中断している内に中年となり、社会の中で中核的な立場になれば精神的に追い詰められることも想定され、そのはけ口として継続的に使用してしまうこ

とに繋がっている可能性がある。また、中高年となるとそれなりの経済力をもっていることから、金銭的なハードルが低くなることも覚せい剤に手を出すことへの後押しになってしまっているものと考えられる。

このような問題を放置していると中高年の世代の覚せい剤の蔓延が続き、社会崩壊に繋がる恐れが多分にある。覚せい剤の蔓延はネット上の情報が大きな鍵となるが、知人友人関係での広がりも十分に予想される。これらを阻止するためには、水際での防止が重要であるが、若い世代がいずれ中高年を迎えることを鑑みれば、学校教育での啓発活動の意義は極めて大きいと言える。これまで学習指導要領の改正<sup>1)、2)</sup> や学校教育での啓発活動<sup>3)、4)、5)</sup> は国として行っているが、その趣旨が子ども達に真に浸透し、その成果が十分に達成されているとは言い難い。

そこで、本研究では九州内中堅都市の中堅高等学校の教諭に対して、覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育のあり方について書面調査を行い、より効果的な教育の改善充実について検討を重ねることとした。

## II. 調査方法並びに結果

福岡県の中堅都市中堅進学校であるA高等学校に勤務する教諭50人に対して、無記名式の次のような書面調査を行った。回答は任意とし、得られた回答結果は統計的に処理し、学校や個人が特定されないように配慮を行った。

書面調査の回収率は、52% (50人中26人)、集計結果は次の通りである。各質問で無回答があった場合は図の割合集計から除外した。回答が0人の項目については図の表示説明から割愛した。また、図中の割合(%)は端数処理の関係で必ずしも合計割合が100%にはなっていない箇所がある。

(質問1) 臨時採用期間を含むとしての勤務経験年数はどのくらいですか？

- ①5年未満 (4人)、②5年以上～10年未満 (3人)、③10年以上～20年未満 (4人)、  
④20年以上～30年未満 (13人)、⑤30年以上 (1人)

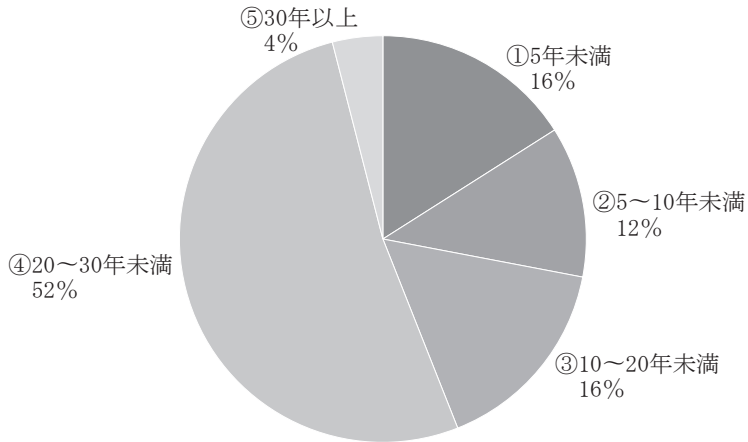


図1 質問1の回答

(質問2) 近年覚せい剤などによる薬物乱用犯罪が増えています、それを防止するためにはどの教育機関において薬物乱用防止教育が必要であると思いますか？

- ①小学校 (17人)、②中学校 (21人)、③高校 (18人)、④大学 (11人)

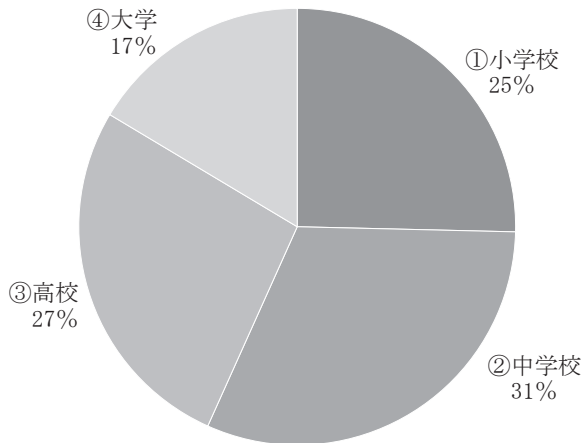


図2 質問2の回答

(質問3) 小学校で覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育を行う場合その頻度はどの程度必要であると思いますか？

①在学中1回(6人)、②在学中2回(1人)、③在学中毎年1回(15人)、④在学中毎年2回(3人)、⑤在学中毎年3回(1人) ⑥必要なし(0人)

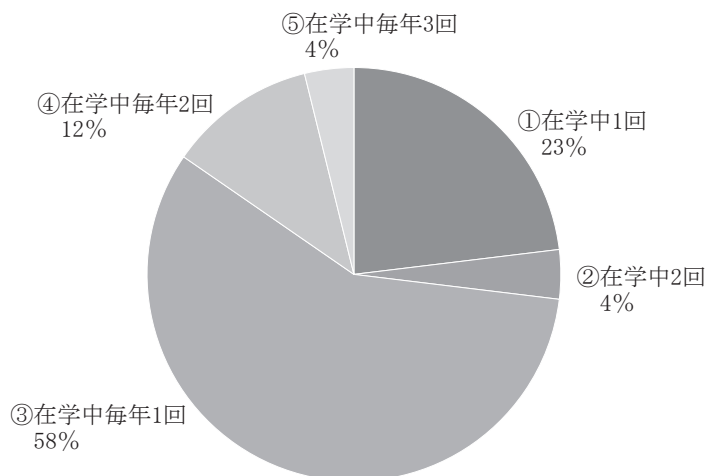


図3 質問3の回答

(質問4) 中学校で覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育を行う場合その頻度はどの程度必要であると思いますか？

①在学中1回(5人)、②在学中2回(1人)、③在学中毎年1回(17人)、④在学中毎年2回(1人)、⑤在学中毎年3回(2人)、⑥必要なし(0人)

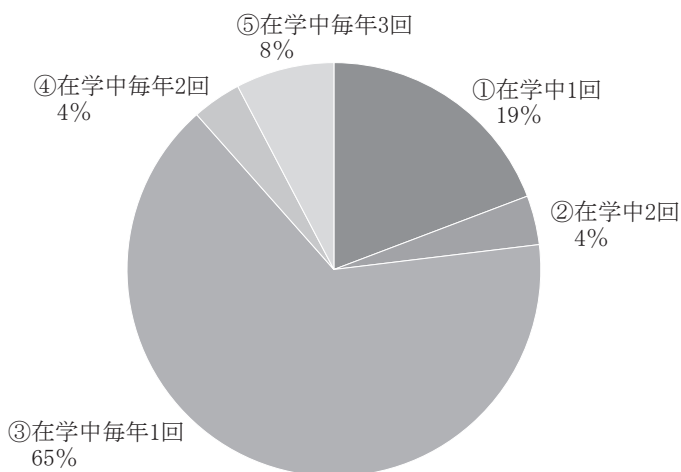


図4 質問4の回答

(質問5) 高等学校で覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育を行う場合その頻度はどの程度必要であると思いますか？

①在学中1回(5人)、②在学中2回(0人)、③在学中毎年1回(15人)、④在学中毎年2回(2人)、⑤在学中毎年3回(4人) ⑥必要なし(0人)

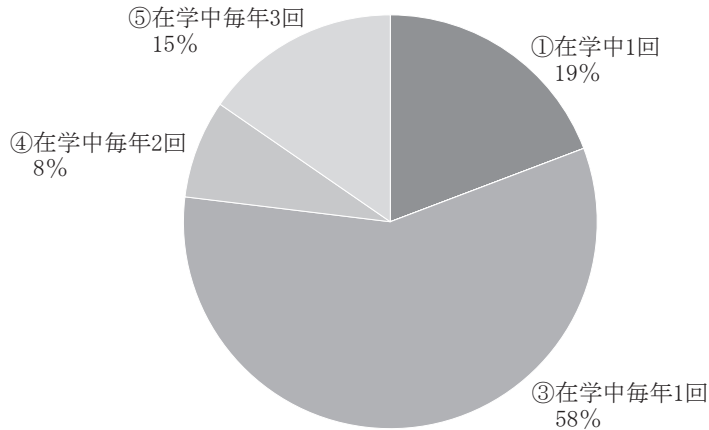


図5 質問5の回答

(質問6) 覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育に関して中高連携は必要であると思いますか？

①強くそう思う(1人)、②まあまあそう思う(11人)、③あまりそう思わない(13人)、④全くそう思わない(1人)

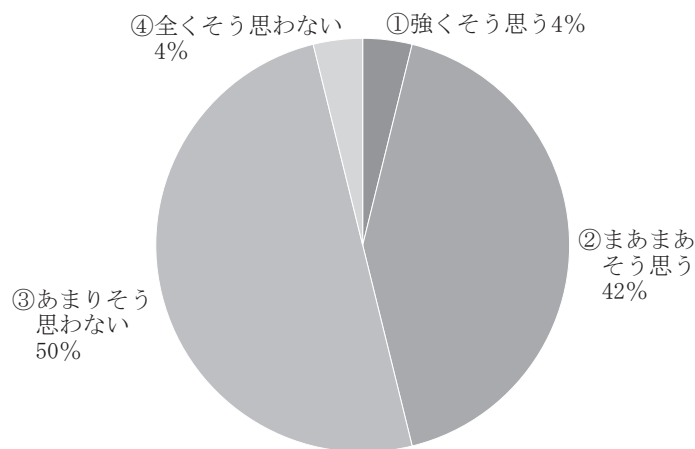


図6 質問6の回答

(質問7) 覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育に関して小中高連携は必要であると思いますか？

- ①強くそう思う (1人)、②まあまあそう思う (9人)、③あまりそう思わない (14人)、  
④全くそう思わない (2人)

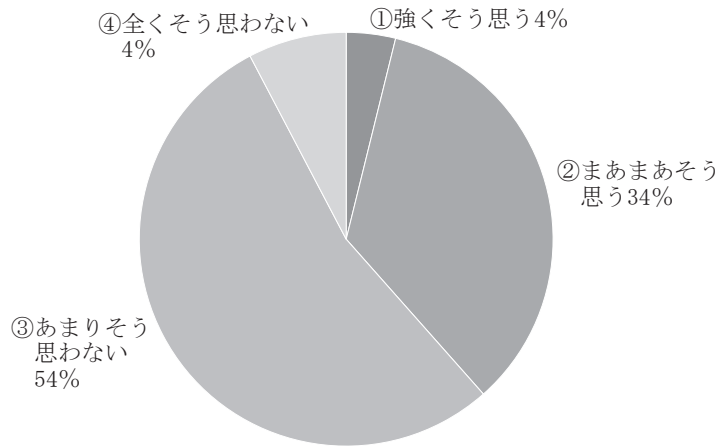


図7 質問7の回答

(質問8) 覚せい剤について、本校生徒は関心を寄せ、危険なものであると認識していると思いますか？

- ①強くそう思う (5人)、②まあまあそう思う (18人)、③あまりそう思わない (3人)、  
④全くそう思わない (0人)

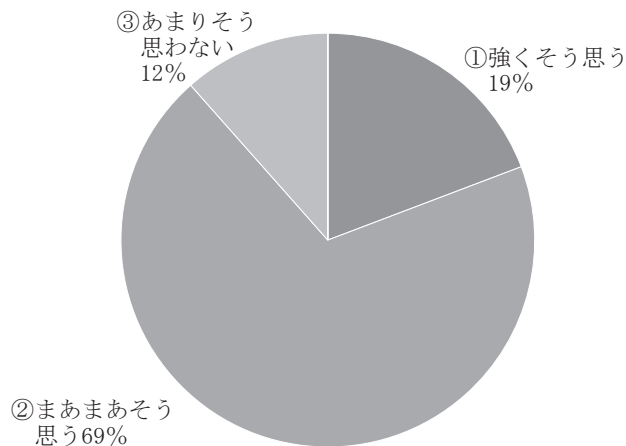


図8 質問8の回答

(質問9) 高等学校の教育に、覚せい剤を含む薬物乱用防止教育の導入が必要であると思いますか？

- ①強くそう思う (8人)、②まあまあそう思う (17人)、③あまりそう思わない (1人)、  
④全くそう思わない (0人)

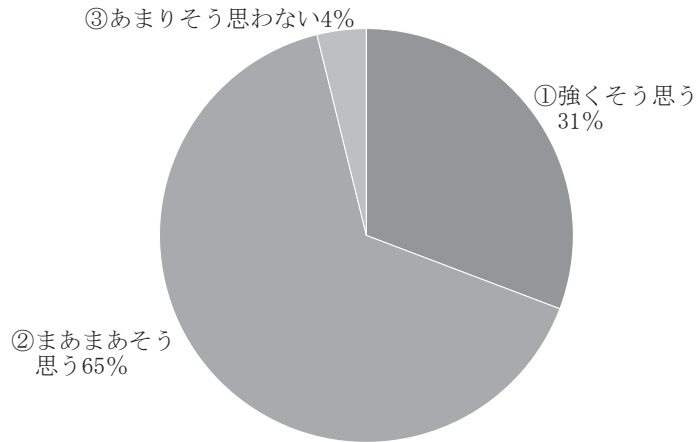


図9 質問9の回答

(質問10) 高等学校で、生徒に対する覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育を行う場合誰が核となって教育するのが最も適当であると思いますか？

- ①学校の管理職 (2人)、②養護教諭 (5人)、③保健体育教諭 (6人)、④学年主任又は担任教諭 (5人)、⑤医師又は薬剤師 (9人)、⑥大学等の薬物研究者 (1人)、⑦国や地方の行政担当機関 (4人)、⑧警察官 (18人)、⑨その他 (2人)

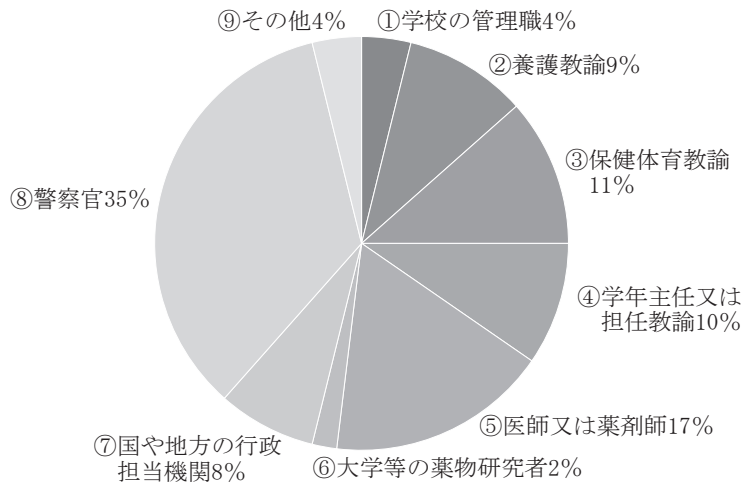


図10 質問10の回答

(質問11) 今、先生個人として生徒に覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育が行なえる準備ができていると思いますか？

- ①強くそう思う (1人)、②まあまあそう思う (13人)、③あまりそう思わない (8人)、  
④全くそう思わない (4人)

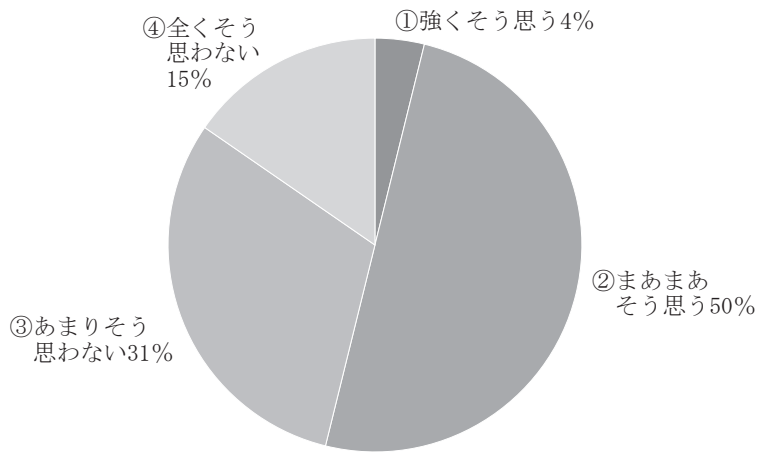


図11 質問11の回答

(質問12) 教員免許更新講習講座に薬物乱用防止教育講座があれば率先して受講したいと思いますか？

- ①強くそう思う (2人)、②まあまあそう思う (13人)、③あまりそう思わない (10人)、  
④全くそう思わない (1人)

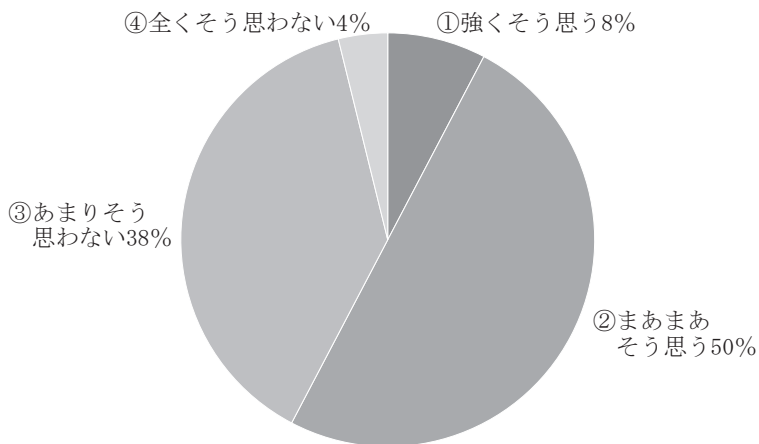


図12 質問12の回答



(質問13) 高等学校における覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育に関し、職員教育(研修)は必要であると思いますか？

- ①強くそう思う(2人)、②まあまあそう思う(14人)、③あまりそう思わない(5人)、④全くそう思わない(0人)

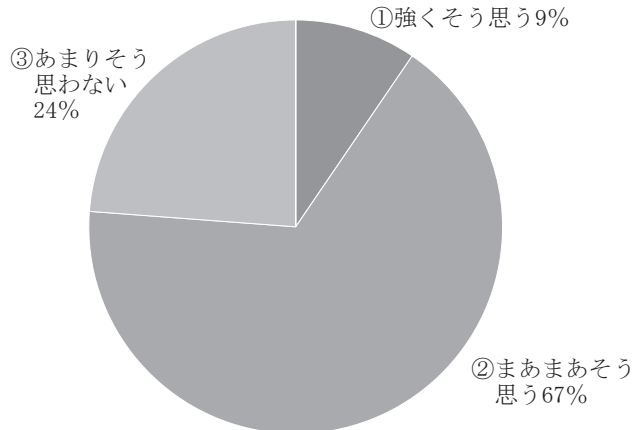


図13 質問13の回答

(質問14) 高等学校における覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育に関し、保護者教育(研修)は必要であると思いますか？

- ①強くそう思う(7人)、②まあまあそう思う(18人)、③あまりそう思わない(1人)、④全くそう思わない(0人)

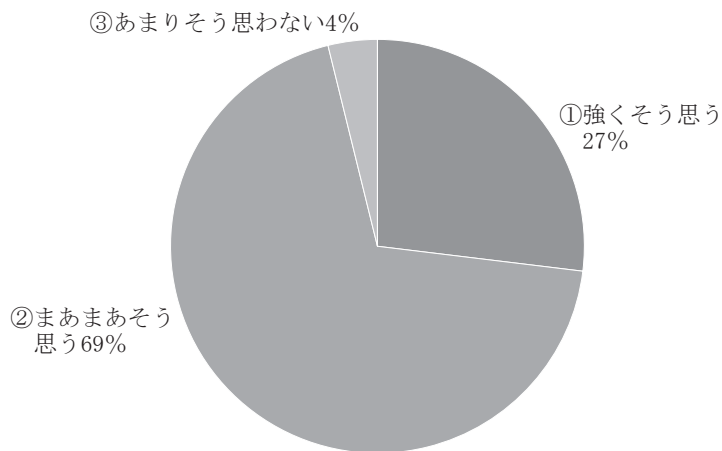


図14 質問14の回答

(質問15) 薬物乱用防止教育の中で最も力を入れるのは覚せい剤であると思いますか？

- ①強くそう思う (3人)、②まあまあそう思う (17人)、③あまりそう思わない (4人)、  
④全くそう思わない (2人)

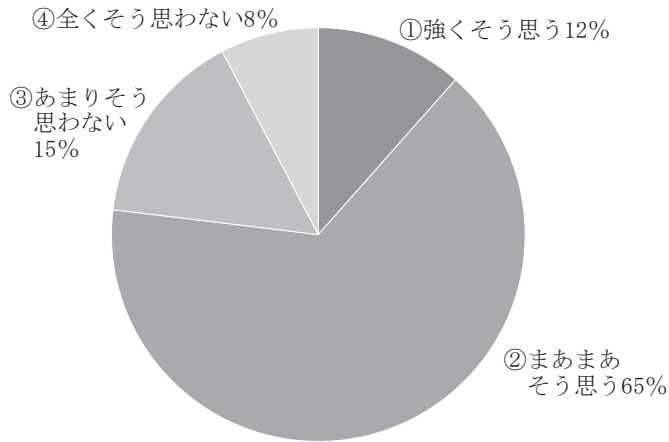


図15 質問15の回答

(質問16) 高等学校における薬物乱用防止教育に関して何かお気づきの点がございましたら、記述いただければ幸いです。

- ・「覚せい剤を使用してはいけない」くらいの安易な知識しかもっていない生徒が多く、使用した場合の社会における信用失墜、刑罰等は理解していない。
- ・生徒と一緒に講演会等を聞いている。
- ・アプローチの仕方を工夫して、この教育が大切であるということを当たり前になるようにする。
- ・学校でこの教育活動があるのは、社会の常識であるというものにするのが求められていると思う。

### III. 考察

薬物乱用問題については、覚せい剤、大麻、指定薬物、MDMA、コカイン、ヘロイン、あへん及びシンナー等がありその作用はそれぞれ特徴を有しているが、その作用が一定の分かりやすい作用であるものと危険ドラッグなど成分が複雑であるがために作用予測が極めて困難なものがある。この中で、覚せい剤の作用は中枢興奮によるものとして比較的把握はしやすいものであるが、依存性<sup>6)</sup>が強く1回手を出してしまうとその報酬的感覚から次の使用を強く求めてしまうことに繋がりやすい。

覚せい剤はそのイメージから最初から手を出さず、他の薬物例えば大麻や危険ドラッグがgatewayドラッグ<sup>7), 8)</sup>となることが少なくなく、より刺激的な作用を求めようとして自然と覚せい剤へと引き込まれることが多い。近年の傾向として、著名人や学校の管理職など覚せい剤の所持と使用で検挙される例がマスコミ等の報道で目立っているが、これは氷山の一角であり、全体としては中高年の世代の覚せい剤使用者の増加があると言われている。しかしながら、このような中高年の世代の覚せい剤使用の増加は、その世代で新規に現れた事象は少なく、若い世代で初めて経験をしている。それを使用したり、中断している内に中年を迎え、同時に社会の中核的な責任の重い仕事を担うようになり同時に多数のストレスを感じ、その反動として覚せい剤に手を出してしまうのではないかと考えられている。

ただし、中高年の世代の増加は昔の使用経験が引き金となっていることが多く、それを断ち切らなければいつまでたっても覚せい剤の使用者は全体として増えることがあっても減ることはないと言える。そのため、やはり若い世代での薬物乱用防止教育による啓発活動は極めて重要である。その中で、特に覚せい剤はその使用に関し引き込まれ抜け出せないような強い依存性が非常に懸念される所である。

そこで、今回は高等学校教諭に対してこれまでの薬物乱用防止教育に関して振り返りをして頂けるような書面調査を行い、今後の学校教育の果たすべき課題について検討を加えることにした。

今回の結果から、覚せい剤を中心とした薬物乱用防止教育は、小学校から大学にかけてほぼ均等な割合の必要性の指摘があった。そしてその頻度はそれぞれの学校で年1回は必要としている。教育連携の必要性は40%前後の指摘であったが小中高連携より中高連携を多く指摘していた。これは子どもの成長発達を意識したものと考えられる。在籍する高校生に覚せい剤を危険なものとして認識させることとその乱用防止教育の必要性を多くの教諭が指摘していた。しかし、その教育を誰が担うのが適切かということに対しては、警察官が最も多いという結果になった。これは覚せい剤というものが犯罪という範疇で捉えてしまうことによる影響と考えられる。しかしながら、法令規制や罰則さらに取り締まりのイメージでの警察官への期待が高いのであろうが人への生理作用、保健衛生上の危害を伝えることができなければ説得力のある啓蒙活動には繋がらないと考えられる。また、乱用される恐れのある薬物の中

には医療上治療に有益な中枢作用を有しているものもあることから、保健衛生上の専門家を投入し、そのような領域での有効活用されている医薬品の役割の理解を進めて行くことも重要である。いずれにしても、学校教育の場では、警察官などの外部講師の重要性は堅持しつつも、教諭の学習や研修の機会の重要性は自覚し、指摘していることも考えれば、やはり教諭がリーダーシップをとりながら教育を実施していくことが重要であると考えられる。そのような方針の方が、生徒と一緒に学ぶということに繋がり、生徒の共感と理解を深く得ることに結びつくものと考えられる。要は、形骸化した薬物乱用防止教育ではなく、心に響く教育が実践できるかが大きな課題であり、そのためにも学校自体が常にこの問題に関心をもち生徒と共に考えを深めていくという環境づくりが大切である。

最後に、今回の調査から得られた回答はキャリアが20年以上の中堅及びベテラン教諭が過半数を占めていたが、若手教諭の世代感覚と研修プログラム提案も尊重しながら、時代に即した薬物乱用防止教育が生徒と共に一丸となって継続的に推進<sup>9)</sup>されていくことを期待したい。

#### IV. 謝辞

本研究を進めるにあたり、調査にご協力頂いた高等学校関係各位に深謝する。

#### V. 参考文献

- 1) 文部科学省:中学校学習指導要領解説 保健体育編 (2008)
- 2) 文部科学省:高等学校学習指導要領解説 保健体育編 (2009)
- 3) 日本学校保健会:喫煙、飲酒、薬物乱用防止に関する指導参考資料 小学校編 (2010)
- 4) 日本学校保健会:喫煙、飲酒、薬物乱用防止に関する指導参考資料 中学校編 (2011)
- 5) 日本学校保健会:喫煙、飲酒、薬物乱用防止に関する指導参考資料 高等学校編 (2012)
- 6) 土田英人、若者の薬物乱用・依存、京府医大誌、119 (6) (2016) pp.397～403
- 7) 沼澤 聡、乱用薬物の最前線 違法ドラッグのトレンド、昭和大学薬学雑誌 4 (1) (2013) pp.13～25
- 8) 谷川尚己、薬物乱用の現状と防止に向けた取り組み、アカデミックアワー研究報告、びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 (13) (2013) pp.89～91
- 9) 松本禎明、坂井留美、三島健一、江頭伸昭、岩崎克典、藤原道弘、大麻の乱用防止と高等学校教諭の意識に関する研究、九州女子大学紀要第46巻2号 (2010) pp.131～150

## The consciousness of the high school teachers in the prevention of drug abuse education mainly on the stimulant drugs

Yoshiaki MATSUMOTO<sup>\*1</sup>, Yukari NARUSAWA<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>Advanced course of child care and education at Kyushu Women's Junior College  
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

<sup>\*2</sup>Genkai High School, 6-1, 3-chome, Mainosato, Koga-shi 811-3114

### ABSTRACT

A drug abuse problem brings big harm to social life as well as a private life and home life.

A stimulant drugs revolt point can increase in concentration by a little and get exhilarating feeling at first. But the intake often increases gradually to cancel an unpleasant feeling by influence of tolerance of stimulant drugs. Because it's deep and related to hold interest in a background of drug abuse, the enlightenment activity by schooling in the generation that they're young is very important.

We performed a document investigation about the way of the prevention of drug abuse education mainly on the stimulants for the teachers of the high school. As a result, there was indication that the need of the cooperation beyond the kind of the school and not only the students but also training of the teachers were important to prevention of drug abuse education.

It is important that students cooperates with teachers and continues learning to practice prevention of effective drug abuse education.

Keywords: drug abuse, education, school